

大統領暗殺事件 ①

おやさと研究所教授
森 洋明 Yomei Mori

マヤマヤ空港から街の中心へ続く道は、片側2車線の広い舗装道路である。フランス文化センターがある市内で最も大きいロータリー交差点(ラウンドアバウト)からは、現大統領の名前をとってドゥニ・サス=ンゲソ通りと呼ばれている。その道路沿いには、法務省や内務省、軍の施設やさまざまな国際機関の建物があり、大統領府もその沿道に位置している。そこからもう少し街の中心に近づくと、マリアン・ングアビ博物館(Musée de Marien Ngouabi)がある。暗殺された3代大統領の記念館で、1981年に設立された。



マリアン・ングアビ大統領の霊廟

広大な敷地は鉄の柵で囲まれていて、その中には植民地時代に軍関係が使用していた建物が残されている。独立後もコンゴ軍の宿舎として使用され、軍人であったングアビもそこに居住していた。また、通りから見えるコンクリート造りの重厚な建物は故人の霊廟となっている。建物の壁には「マリアン・ングアビ大統領の不滅の栄光 (Gloire immortelle au Président Marien Ngouabi)」と書かれている。なお、この博物館は90年代初頭の国民会議で「国立政治歴史博物館」と名称が変更された。

ングアビ大統領暗殺事件は、1977年3月18日の白昼に起きた。当時、彼は毎週金曜日の午前中はブラザヴィル大学(後にマリアン・ングアビ大学に名称が変更)で教鞭をとっていた。軍人として階級を順調に登っていく一方で、彼は太陽エネルギーの活用に関心を持っていて、フランスで物理学のDEA(高等教育免状)を取得していた。その日、大学の講義を終え統合参謀部に戻ってきた大統領は、昼食の前に2人の面会に応じている。その内の1人はエミール・ピアエンダ(Emile Biayenda) 枢機卿で、後に大統領に面会したことで命を落とすことになる。ングアビ大統領は大統領官邸には住まず、それまでの住居を使っていたようだ。昼食を済ませた大統領は、近づいてきた3人によって突然襲われ、銃弾で命を落としたのである。軍の病院に運ばれたが、死亡が確認されただけだった。

この大統領暗殺の実行犯の1人はその場で射殺されたようで、事件に直接関与したとされる人たちもその後処罰されてしまった。関係者が亡くなったことで、暗殺の目的や実際に彼らを動かしたとされる黒幕に関しては明らかになっていない。それは現在も謎として残っていて、真相ははっきりしないままである。

大統領が暗殺された後の軍の動きは迅速だった。その夜にはすぐに大統領に代わる暫定的な「党軍事委員会(Comité militaire du Parti)」が発足した。メンバーは軍の高位にある11名で構成された。大統領の権限を引き継ぎ、1973年に制定された憲法による国家体制の一時停止を決定し、戒厳令を敷いた。ただ憲法では、大統領が不慮の出来事で不在となった場合は、国民議会の議長が代行すると定められていたが、それは適用されなかったのである。この委員会はその後4代大統領となるヨンビ・オパンゴ大尉とその後継者となるサス=ンゲソ少佐によって指揮されていた。

この暗殺事件の前からすでに、政治的に不穏な動きはあった。

例えば、1972年2月にクーデター未遂事件が起きている。首謀者たちは政府要人を拘束し、ラジオ局とマヤマヤ空港を占拠した。そのとき、首都から500km離れたボワント・ノワールにいたングアビ大統領は、フランス人が操縦するセスナ機を借りてその日の夜に首都に密かに戻り、クーデターを鎮圧することができた。また自身が創設したコンゴ労働党(PTC)のなかでも、彼の政策に異を唱えるものもいたようで、党内で少しずつ孤立し始めていたようである。さらに、1976年3月には、ヘリコプターの事故で九死に一生を得たこともあった。当時、国の経済は悪化の一途を辿り、不満の声が国内にくすぶっていた。

こうしたなか、ングアビ大統領はマサンバ=デバ前大統領に意見を求めることがあったようだ。マサンバ=デバはングアビによって大統領辞任に追いやられたが、その後2人は何回か会談を行っていた。大統領の命が狙われていると、マサンバ=デバが助言したこともあると言う。なかには、ングアビ大統領がマサンバ=デバに政権を返すという計画があったとも言われている。しかし、大統領が暗殺された1週間後、この前大統領は暗殺の首謀者として処刑されるのだった。

ングアビ大統領は、自身に降りかかる危険を察知していたのかもしれない。暗殺される5日前の演説で彼は「国が汚れ恒久平和を失うとき、その血でもって国を洗い流すしか清廉と統一は取り戻せない。(Lorsque ton pays est sale et manque de paix durable, tu ne peux lui rendre sa propreté et son unité qu'en le lavant avec ton sang.)」という予言とも取れる謎めいた言葉を残している。

ブラザヴィルから国の北方へは国道2号線が通っているが、45kmまで進んだところに、その距離にちなんで「キャラント・サンク(Quarante-cinq:45)」と呼ばれる村がある。そこにもマリアン・ングアビ博物館がある。2010年私が訪れたときは、街中にある立派な博物館とは異なり、建物が老朽化し、維持管理が十分なされていない印象を受けた。薄暗い部屋には古びた銃や故人の遺物とともに、旧式のラジオが置かれていた。屋外には古いセスナ機とボロボロの車があった。

実は、1972年のクーデターの際、ングアビ大統領が急いで首都に戻るためにセスナ機で降り立ったのがこの村だった。マヤマヤ空港は反乱軍に占拠されているので使えない。そこで舗装された国道2号線にセスナ機を着陸させたのである。ングアビ大統領はその後、たまたま通りかかった車を借りてブラザヴィルへ戻って行った。その車の運転手は「私は大統領だ、緊急事態だから車を貸してくれ」と言われても、すぐには信じられなかったようである。博物館に置かれていたセスナ機と車はその時に使われたものである。そしてラジオは、「首都に戻って2時間後に政権を取り戻し、ラジオを通じて公表をする」と言って大統領が村に残したもので、実際、村人たちは、2時間後、クーデターが鎮圧されたニュースをそのラジオで聞いたのだった。

